

第2節 ハンセン病差別が訴えるもの

1 映画『砂の器』と自らの差別意識

私がハンセン病を初めて認識したのは高校2年時の時、当時映画化され全国で封切られたばかりの『砂の器』(作・松本清張)を見たときだった。その映画の後半、主人公の父親がハンセン病に感染したことにより、その家族が受けた差別や迫害、そして、父親が故郷を追われ、幼い息子(主人公)を連れて放浪する姿が20分あまり描かれていた。私はその場面に涙が止まらなかった。

その映画『砂の器』を大学時代にも見ているが、同じようにその場面で涙が溢れてきた。いずれの涙も、こんなことがあってたまるかという腹の底からこみ上げてきた怒りの涙であったと思う。しかし、私は長島愛生園(岡山県邑久郡邑久町虫明)で、その涙の意味を強烈に自問自答するようになる。

私が初めて長島愛生園を訪れたのは、1998年6月であった。国立ハンセン病療養所があり、元ハンセン病者が生活している長島愛生園で、ハンセン病問題についての研修とフィールドワークが実施されるということで参加させていただくことになる。

私は長島愛生園へ車で行くのだが、その道中、ハンセン病に対する自らの無知から様々な葛藤が私の中でおこっていく。特に、長島に入るとき、人間回復の橋として、1988年5月にやっと開通した邑久長島大橋を渡るわけであるが、そこでハンセン病差別の不合理はしっかりと自覚しながら、自分のハンセン病に対する無知から、心の底では「ここに来てよかったです」と怖れ、おびえている自分がそこにいた。

それはまさにハンセン病に対する無知からくる差別意識が自分を苦しめているのであった。高校時代や大学時代に映画『砂の器』を見て流した涙は、自分を安全なところにおいた同情や哀れみの涙であったことを強烈に認識した瞬間であった。

2 無知が差別意識を生み、自分自身を卑屈にしている

私は長島愛生園の園長であり、日本で数少ないハンセン病の専門医である中井先生からハンセン病についての説明を聞く中で、心の底にある怖れやおびえが段々と洗われていく自分を認識していく。まさにハンセン病に対する無知が強烈な差別意識を生み、自分自身を苦しめ、卑屈にしていることを自覚させていただいたのが、中井先生からの講義であった。

それは、部落の人間として部落差別の悲しみや苦しみを口にしながら、別の問題になると全く違う意識になっている自分を強烈に自覚した瞬間である。真実を学ぶことが、様々な問題を解決していくことにつながっていくことを明確に示していただいたのが、中井先生との出会いであった。

そして、その午後は、ハンセン病差別と民族差別に向き合って生きておいでる金泰九さんにお世話になる。金泰九さんとの出会いは、私にハンセン病の問題について学習していくことの意味を強烈に問い合わせていただく出会いとなつた。在日という立場で民族差別とハンセン病差別という二重の差別を生き生きと跳ね返し、教育の可能性を語られる金さんとの出会いは感動の連続であった。

私は2001年8月12日にも、家族そろって長島愛生園での研修とフィールドワークにも参加させて

いただいたが、当時中学2年の中女と小学校5年の次女にニコニコと語りかけていただき、元ハンセン病者が学んだ岡山県立邑久高等学校新良田教室の跡地の残されている石碑『希望の碑』の文面を長女に代表して読むように声をかけていただいた。

希望の碑

人間回復をめざして展開された全患協のらい予防法改正運動の結果、1955年9月16日、此地に、岡山県立邑久高等学校新良田教室が開校された。

以来30余年、病苦と闘いつつも、人間らしく生きたいとねがい、社会復帰をめざして、研学不抜、心身の鍛錬に励んだ若者は、397名、新良田教室、それは、ここに学んだわれわれの青春と栄光のシンボルである。

この希望の碑は、閉校記念として、同窓生の永遠の心の絆となるよう、建立されたものである。

1987年3月3日

新良田教室同窓会

本校教諭 横田 廣太郎 書

金さんは、このときも、この文面を一生懸命読み上げた長女を思いっきりほめてくれる。金さんとの出会いは、深い愛を家族全員に注いでいただく出会いとなっている。



国立ハンセン病療養所 長島愛生園 全景



邑久長島大橋



岡山県立邑久高等学校新良田教室跡地



2001年8月12日 金泰九さん（中央）於・長島愛生園

3 人間の無知からくる差別の厳しさを思いっきり自覚する嘗み

金さんと初めて出会った1998年6月から3ヶ月が経過した1998年9月、私のふるさと（徳島県板野郡吉野町）の住民学習の講師に金さんがおいでになることになる。その翌日、藤田孝志先生（岡山県備前市立備前中学校）を通じて、金さんに板野中学校の生徒に会ってほしいということをお願いするが、そのとき金さんは「これから社会を担う若い人たちにこそわかつていただきたい」と言われ、板野中学校の全校生徒に話ををしていただくようになる。

しかし、私は、当時の生徒や生徒を取り巻く家族、地域社会の中にあるハンセン病に対する厳しい差別の現実を思いっきり実感するようになる。2001年ハンセン病差別の現実がマスコミの中で取り上げられ、裁判闘争から、様々なハンセン病差別克服の取り組みが行われているが、1998年当時、私たちの地域社会において、まさにハンセン病差別は常識であった。

私のクラスの生徒も、金さんを迎えるということを家族と語る中で、家族から思いっきりハンセン病差別の現実を自覚するようになるが、それは人間の無知からくる差別の厳しさを思いっきり自覚する嘗みであった。

私はこの現実から様々な差別の問題を学ぶことの重要性と、部落問題を学ぶことが様々な差別を学んでいく土台になっていることを自覚する。生き生きとその生きざまを語られる金さんとの出会いは、一人一人の生徒にとって新鮮な感動が広がっていく。そして、金さんの講演に対して生徒たちは素直にその思いを返していく姿に、出会うことのすばらしさを私は再認識していくのである。

講演を聞いた生徒たちは、その講演の感想や講演者に手紙を書くことで学習を締め括ることが多いが、金さんとの出会いをより確かなものにしていくために、翌日金さんの講演に対する思いを語り合う道徳学習を実施する。その授業の中で生徒は自分自身と対話するように、金さんの講演に対する思いを語っていく。私はこの授業記録を金さんに送ろうと考えていたが、その記録を一人の生徒がわずか2日でノートに整理してくる。

私はこれまで、40本を越える授業をまとめているが、その作業は大変なものであり、よく頑張つても2週間近くかかるのが普通であったが、その生徒はわずか2日でまとめてきたのである。その生徒は「先生、金さんに早く送ってね」とニッコリと私に語りかける。そのときの笑顔が、今も私の中に生きている。中学生の持つエネルギーに私は支えられ、励まされ続けている。

以下、金さんとの出会いに向けて学んだ資料と授業記録である。

ハンセン病差別について

皆さんは、ハンセン病という病名を聞いたことがあるでしょうか？長島愛生園には、このハンセン病にかかっていた患者が、今でもたくさん療養生活を送っています。

「完全に治る」「普通の病気である」「江戸時代まではいっしょに暮らしてきた」これは岡山市の長島愛生園の研修会に参加したとき、「全然知らない生徒・保護者に、絶対に知っておいてほしいことは？」と元患者さんに質問した回答です。

ハンセン病とは、らい菌が体内に入ることによって発病する感染症で、1873年ノルウェーの医師

アルマウエル・ハンセンによって発見された。末梢神経が侵され、手足、顔などがまひして不自由になるケースが多い。1943年にアメリカで特効薬が開発されて現在は完治するが、長い間「不治の病」と思われ患者が差別や偏見を受けてきた。

1897年、第1回国際らい会議でハンセン病が伝染病であることが確認された当時、日本国内には3万人を越えるハンセン病患者がいたそうです。諸外国との交流が盛んになってきたこの頃、日本国としてハンセン病への対応策がなかったので、欧米からは非難の対象となっていました。日本はこれを「国の恥」とし、愛生園のように患者に押しつけ「隔離する」ことで免れようとした。社会的に葬ることで解決しようとしたのです。そしてできたのが「ライ予防ニ闇スル件」(1907年)であり、その後改正されたのが「らい予防法」(1931年)です。

この法律にたくさんの規制があるため、園内でいてさえもそれに反抗した者は、制裁を加えられ、監禁も行われていたそうです。「もっとおにぎりが欲しい」と呟いただけで監房に閉じこめられたことも…、ハンセン病だというだけで無実の罪(冤罪)をさせられたこと也有ったと言います。病気になれば、心も病み、ただでさえ憂鬱な毎日が続くはずです。時にはイヤになって、周りに当たり散らしたくなることもあるでしょう。その心の痛手を癒すはずの病院で、患者さんたちは逆に虐待を受けていたのです。

またそれらの差別は、現代においても醜く残されているそうです。大阪に住んでいるYさんは、無言電話や「おまえはここに住んではいかん人間や。出て行け！」といった電話に悩まされていたと言います。(治るので、Yさんは普通に通院治療をし、生活している)

また、かつてこの島には、小・中学校の分校や、高等学校すらあったそうです。(昭和30年岡山県立邑久高等学校定時制新良田教室開校、患者の減少で昭和62年閉校)今でもその懐かしさを感じさせる木造校舎は現存していました。そして、394名の卒業生が病気を完治させ島を出ていったと言います。でも、みんな自分の出身校を語りたがらないそうです…。そんな中、残った人々の平均年齢も73才になったそうです。

でも今、この島には一つだけ学校があります。それは看護学校です。たくさんの学生さんが、医療や介護、そして差別問題について学んでいるそうです。

この法律は、つい最近の1996年になって、ようやく廃止されました。戦後すぐに特効薬が輸入されたにもかかわらず、それから50年以上経過しているにもかかわらず、やっとのことでこの差別法は廃止されたのです。廃止までは長く険しい道のりでしたが、多くの関係者の努力でようやく実現されたのです。

しかし、今入園している方々の青春や人生はどうなるのでしょうか？

やり場のない怒りがこみ上げてきます。故郷へ、また残してきた家族へと募る想い。かつては園内生活の不満などから、脱走する者が後を絶たなかつたと言います。しかし四方を海に囲まれた施設のため、海峡を渡ろうとして早い潮の流れに巻き込まれ、命を落とした人もたくさんいたそうです。お金は園内でしか使えないお金しか持たせてもらえませんでした。ですから、脱走しようと島近くを通る漁師を雇うことすらできませんでした。

「死んでも家には帰ってくるな」「死んでも家族に迷惑はかけられない」という思いの中建てられ

た納骨堂は、悲しく悔しい思い出の名残となっていました。

部落差別についても、そのことが明らかになれば、「つき合い差別」を受けるという現実が未だあります。たとえ結婚差別は乗り越えられたとしてもです……。私たちには、人権を踏みにじってきた歴史・現実から多くのことを学び、これから時代を創造する義務があるのでないでしょうか。

誰にでもある「ふるさと」。それをすべての人々が大切に誇れる、そんな時代をこの手でつかみ取りたいと、私は思っています。

また、本土と長島愛生園のある長島を隔てるわずか30mの海峡に橋が架かったのは、今から10年前の1988年のことです。長島愛生園が開園したのが1930年ですから、58年もの間、地域や社会から隔離されてきたことになります。橋が開通して10年、この橋はハンセン病療養者の人権回復のシンボルから、地域や社会との交流、ハンセン病に対する理解や、偏見・差別を払拭するためのシンボルとなってきています。

(文責・板野中学校 吉成 正士)

金 泰九さん プロフィール

1926年 韓国慶尚南道 ハップチョンに生まれる。

1958年 12歳の時に渡日、大阪で過ごす。

1945年 陸軍兵器学校にて終戦をむかえる。

1949年 ハンセン病を発病する。

1952年 長島愛生園に強制隔離される。

その後、社会復帰をしていた5年間を除き、今まで愛生園で過ごしてきた。この間、在日韓国・朝鮮人に対する差別やハンセン病患者に対する差別・偏見をなくすために多くの人々との対話、交流を続けている。

「民族差別とハンセン病差別を乗り越えて」 —自らの「ハン（恨）」から解放されるために—

岡山県備前市立備前中学校 藤田 孝志

金さんは、僚友への追悼文に、「ハン（恨）」を「自らの不運を嘆く」という意味で書いたと記している。日本による植民地支配の中で「韓国人」として生まれ育ち、戦後は「ハンセン病」患者として生きねばならなかった金さんの半生は、自らの「ハン」からの解放の旅であった。しかし、それは肩に力を入れた生き方ではなく、「自らの不運」があるがままに受け入れながらも、「自分にできること」を自然体で求め、人生を前向きに生き続けた姿である。

金泰九さんは、1926年、日本の植民地支配下にあった韓国の慶尚南道で、農家の長男として生ま

れる。日本人に対する「恐怖」を周囲の大人から聞かされて育つが、小学校の日本人校長の姿に感銘を受け、日本人に対する意識が少し和らいだ。12歳の時、日本に定住していた父親を頼って日本に渡り、大阪で暮らすようになる。旧制中学校時代、級友から「半島人」と云われ、初めて朝鮮人である自分を自覚した。しかし、当時は同胞である朝鮮人の姿に劣等感さえ抱き、強くなるしかないと柔道部に入って練習に励んだ。朝鮮人としての劣等感を克服するために、尊敬され信頼される人になりたいと考えたからである。級友の多くが予科練に進む状況の中、皇国史觀の影響もあり、軍人を志す。陸軍兵器学校にて終戦、同胞の先輩に「軍人の道はまちがいではなかったか」と言われ、返す言葉がなかった。

復学して大阪市立商科大学（現・大阪市立大学）に入学後は、学生結婚をしたこともある、勉学よりも商売に精を出した。1949年に「ハンセン病」を発病する。残り少ない人生を妻のために生きる決心をして生活するが、1952年、長島愛生園に強制収容された。以後、社会復帰をしていた5年間を除き、現在まで愛生園で暮らしている。

【自分が幸せなときは他人を憎むことはないと思います。また豊かな心を持つ人はそうでない人より偏見、差別もしないようです。世の中みんなが幸福で心豊かに生きるために文化度を高めていきたいと思っています。自分が幸せだと思う「センス」を文化だと思います。】

これは、金さんが難聴の少女に送った手紙の一節である。過酷な運命を生きる金さんが、なぜ常にこれほどまでに柔和で穏やかな笑みを浮かべ、身体の弱った自分よりも周りを気遣う限りない優しさを持っているのか。決して自らの逆境を嘆くこともせず、自信と誇りに満ちて生きているのか。これは金さんと出会った人々が実感することである。

病に苦しみ、人生に失望し、生命を絶った多くの僚友を見送りながら、また厳しい隔離政策と排除の中で、自らの人生を捨てた生き方を選ぼうとする僚友を見つめながら、しかし、彼は決して希望を失うことはしなかった。なぜなら、自らを苦界に追い込んだ「ハンセン病」についての勉強、施設や待遇の改善要求、17年間という長きにわたっての本土への架橋要求や、「らい予防法」撤廃要求など数々の運動の先頭を歩み、彼自身が常に自分に対して「自らの変革」を実践してきたからである。彼はこう書いている。

【まず入所者の我々が自らを病気であったための萎縮と劣等感から解放されることである。】
「差別はねえ、社会全体の不幸なんだよ」と語る金さんの目は、今、より広い世界に向かっている。彼は、自らの生活体験を通して「ハンセン病」に対する偏見や差別を克服するためだけでなく、在日韓国・朝鮮人に対する差別や部落差別などあらゆる差別と闘うために、「語り部」として社会啓発に全力を注いでいる。これが彼の生きざまである。

【差別観念や優越感は、決して人間が生まれながらにして持っているものではなく、差別的な社会のしくみの中で、形成され作用するものだと言う。さらに重要なことは偏見差別は、差別される側だけの不幸でなく、社会一般すべての不幸につながることである。このことを大衆が学び知ることにより、日本における偏見差別は間違いなく減少するはずである。】

この金さんの訴えを通して、今自分に問われている生き方について考えたい。

【授業記録】「民族差別とハンセン病差別を乗り越えて」

-金 泰九 先生の話を聞いて思うこと-

1998年9月5日(土)第2校時

徳島県 板野中学校 2年A組

授業者 森 口 健 司

記録者 赤 澤 史 子

1 本当のことを知らないために差別をしている

T1 : 昨日みんなに直接金さんの思いや願いを聞いてもらったことや、事前に読んだ金さんの資料を含めて、みんなの中に沸き起こってきた思いや願いを語り合いたいと思って、この時間を設定しました。誠実に思いを語ってくれた金さんの表情やみんなの質問に答えてくれた金さんのまなざし、また講演の後で岡山の藤田先生（備前中学校）が語ってくれたこと、その中でみんな自身がつかんだ思いを、長島愛生園に昨日帰られた金さんに届けていく授業にしたいと思います。

赤澤(女)私は金さんの話を聞いて、病気に対する差別についてよくわかりました。講演が始まる前までは金さんはどんな人だろうかと思っていたけど、実際に話を聞いたり金さんの姿を見ていると、普通の人でしっかりしていて日本語も上手だし、私が思っていた姿とは全く違っていました。それと日本の歴史についてもよく知っていて、物知りだなあって思いました。講演会の前にハンセン病について話し合ったり、ハンセン病に対する差別のことでも知ることができて、大変な病気なんだと思いました。だから金さんのこともハンセン病が治っているんだけど、やっぱり差別する意識をもってしまうんじゃないかなって思っていたけど、会つてみると、金さんことを尊敬したし、先生が言っていたように私たちの質問に対しても本当に優しい表情で答えてくれました。だから病気のことを知っただけでは、全然印象とかが違ったりします。やっぱり私は本当のことを知らないために差別をしていると思いました。

2 「私を受け入れてほしい」「私の存在そのものを受け入れてほしい」

T2 : 金さんが「私を受け入れてほしい」「私の存在そのものを受け入れてほしい」ということを何度も言われた。事前にハンセン病の資料を読んだり、金さんのプロフィールについて話したりしたけど、実際に会ってみて、実際に話を聞いて、やっぱりぐっときた部分があったと思う。その部分を大事にしながら、金さんから学んだこと、金さんの話から捉えたことをみんなで深めていきましょう。

阿部(男)金さんはハンセン病に感染して隔離されて差別を受けてきたし、朝鮮人ということで民族差別も受けた。長島愛生園という場所に隔離されて、長い間橋も架からなかったけど、1988年にやっと橋が架かって、地域の人との交流が深まると思っていたと思う。でも、現実にはハンセン病に対するきびしい差別があって、ハンセン病の患者が入った店や食堂にはお客様が来なくなるということがあって、金さんたちはすごくつらかったと思う。交流という願いから架かった橋であるのに、現実にはまだまだ差別がある。ハンセン病はなかなか感染しないということをしっかりと学んで、差別をなくしていく交流をしていきたい。

T3 : 自分はこう思うんだという思いをみんなでつないでいこう。

3 人間関係に国境をつくってはいけない

大西(女)私が金さんの話を聞いて思ったことは、人間はその違いを認め合うことが大切だということです。認め合うという言葉は、差別をなくしていくのに大切な言葉だし、大切な気持ちだと思いました。また、人間関係に国境をつくってはいけないと思いました。いくら外国の人でも、同じ人間だし見た感じの姿、文化は違っても、やっぱり自分といっしょの人間だから認め合うということができたら、外国人の人も同じ國の人もかわらないと思えるんじゃないかなと思います。差別が生まれるということは、やっぱりおかしいことだと

思います。病気の人に対しても同じことが言えると思います。病気を持っていてもいなくても、生きているということは同じだし、病気を持っていても人間でなくなることは絶対ない。だから人間はどんなことがあっても、自分と同じ人間として認めていくことがすごく大切だと思いました。

T4：金さんが講演の中で繰り返し強調された「違いを認め合うという文化を育てていこう」という訴え、みんなの中にどのように響いただろうか。金さんの言葉の一つ一つを思いながらみんなの思いを語ってほしい。

4 病気に対する正しい知識をもっと知つたら、交流の輪が広がる

金田(男)橋が架かった対岸に住んでいる人たちも、ハンセン病は簡単にうつるという間違った意識を持っていたから、長島愛生園の人たちを差別するようになってしまったと思います。やっぱり、僕らも金さんが言ったみたいに、少ない確率でしかうつらないということや病気に対する正しい知識をもっと知つたら、交流の輪が広がると思った。

T5：正しいことを知るということと、知らないということ。そこに起こることを考えていこう。金さんは無知が差別を生んでいくということを語ってくれたと思う。金さんが本当に素直に精一杯に話してくれたことを通して、みんなも素直に精一杯につなげ合っていこう。

奥谷(女)私は講演会が始まる前までは、いろんな気持ちが私の中にあったと思います。特に先生が配ってくれた資料を見ていたら、ハンセン病が感染する確立が低いということが書いてあったけど、私がもしそんなことを知らないでいきなり長島愛生園につれて行かれて、その状況を見たとしたら、たぶん同じように差別したと思うから、こういう機会ができてハンセン病やその差別について考える機会ができてよかったです。

川上(男)僕は金さんの話を聞いて思ったことは、昔、金さんやハンセン病の人たちは差別されて、強制的に隔離されすぎて嫌だったと思います。けど僕も金さんが来るので感染をしないのかなあと思っていました。けど森口先生やいろんな先生から、感染はなかなかしないと聞いて、だったらなぜ昔の人たちはなかなか感染しないハンセン病の人たちを嫌がっていたんだろうと思いました。もしハンセン病にかかるって今はハンセン病の特効薬があって簡単に治るのに、なぜ今でも藤田先生の話のようなただ見た目が違うだけで、ハンセン病の人を踏みつけた差別的なことをするんだろうと思いました。けど僕はハンセン病のことについてもっと知らなかつたら、僕もそんなことをしてしまうかもしれないで、もっとハンセン病や差別の問題について知つたらいいです。

5 差別の間違いを訴えて、一生懸命闘ってきた姿が自分の心の中に残った

木内(女)私は今までハンセン病のことを知らないで、どんな病気か全然知らなくて、金さんが来ることがちょっと不安だった。それで来てくれて話を聞いたら、ぜんぜんうつらないっていうことがわかつたし、ハンセン病患者として差別を受けていても、民族の違いによる差別を受けても、その差別の間違いを訴えて、一生懸命闘ってきた姿が自分の心の中に残った。

T6：みんなの中には既にハンセン病のイメージがそれぞれにあって、中には包帯がグルグル巻きの人が来て、すごい恐いというイメージを持っていた人もいると思う。実際「もののけ姫」という映画に描かれていたハンセン病の患者さんの姿がそうだったので、そのイメージが残っている人もいたと思う。私たちはその一面を捉えるのではなく、その深い部分をもっともっとしていくことが問われていくと思う。実際様々な病状の方がおいでるだろう。金さんのような病状の方、もっときびしい病状の方、ハンセン病の患者さんの置かれている状況は皆それに異なるだろう。でもいろんな人の姿を人間としての違いを違いとして認めて、その存在があるがままに認めていくことが、まさに人間がどんな状況に置かれても安心して生きられる社会をつくっていくことになり、みんな自身の存在をまるごと守っていく社会をつくっていくことにつな

がっていくと考える。金さんの訴えを通してみんなが考えたこと、どんどんつなげてほしい。

日下(男)僕は最初森口先生からハンセン病の話を聞いたとき、金さんへの思いはとても嫌なイメージだったけど、実際に金さんの話を聞いて、金さんはものすごくいい人だなってわかりました。

T7 : 素直に語ってくれた金さんにみんなの素直な言葉を返していくこう。

楠本(女)私は昨日金さんに会って人間の生き方についていろいろと考えさせられました。私は金さんが話してくれたように、他の人にも個性があるから、金さんの個性も大事にしたいと思ったし、金さんから教えてもらったことを実際の生活の中に生かしていきたいと思いました。

T8：金さんが繰り返し語ってくれた「違いを違いとして認め合う文化」という言葉をみんなの胸に刻んでほしい。

6 知らないから少しのことで差別をする

佐野(男)僕は金さんとの出会いを通して初めてハンセン病という言葉を知りました。そして、その病気のために差別されてきた人々のことを聞いてどうしてと思いました。ハンセン病は末梢神経が冒されて、手先、鼻の先が痛んでくると言います。確かにきついところがあるけど、やっぱり人は外見で判断してはいけないと思います。知らないから少しのことでも差別をするんだと思います。先生は無知が差別を生むと言いますが、全くその通りだと思いました。僕もまだ知らないことがあるので、しっかりと学んでいって力をつけたいと思います。

T9：金さんが本当に精一杯語ってくれたことに、みんなも精一杯の思いを返していく。先日、金さんと夕食をごいっしょさせていただいたとき、夜になると目が見えにくいし、手も足も下がっているために階段などがあると、つまづきそうになる。これは講演の中でも話があったことだけど、本当にきびしい中で生きておいでた金さんであるけど、金さんはみんなに会うことを本当に楽しみに来てくれた。金さんが板野中学校に来てくれることが決まったのは9月1日です。金さんは今までいろんなところで話をされているけど、これから時代をつくる中学生や小学生に話すことが金さんの一番のよろこびだと言われました。そして、これから時代をつくるみんなに違いを違いとして認め合う差別のない文化、差別のない社会をつくってほしいという願いを込めて、私は72歳だけど、私の日本で生きた在日韓国人としての60年間、ハンセン病患者としての49年間を伝えながら、違いを違いとして認め合っていく社会のすばらしさを伝えたい。そして、ハンセン病の差別を通して様々な差別をなくしていく道筋を考えていきたいと話されました。自分の存在をかけて語ってくれた金さんにつなげて語ってほしい。

7 私はみんなのことを認めていきたいし、私も認められたい

新名(女)藤田先生の話の中で橋が架かったとき、長島の対岸に住んでいる岡山の地域の人々が、橋が架かることにすごく反対したと聞きました。私たちは知らないことが多かったけど、金さんが来て正しい知識を持つことができて、意識が変わったと思います。でも、その地域の人が反対するっていうのは、知識があっても、何か自分の心の中に弱い部分っていうのがあるのかなあと思います。見た目で人を判断したりしてしまとか、そんな弱さを人間は持っていると思います。遠くのことにはきれい事を言えても、私の住んでいる地域にそういうところがあるって、もしその人に会ったとき、実際そのときにならないとわからないけど、意識の中では差別する意識があるのに、そのことをごまかして表面的には、自分をごまかしてきれい事を言っている自分がいるような気がします。でも違いを認めないということは、逆に言うと、自分も違いを認められないということだと思う。外見だけど、その人を差別していても、私だってみんなと違うから、自分自身も差別されるかもしれないし、もし差別している人がいるとしたら、その人に対しても同じことが言えると思う。違いを認められないということは不幸なことだと先生は言ったけど、私もそうだと思います。差別

するっていうことは、生活していく中でしんどいし、悪循環でお互いを傷つけ合っていくことになると思^う。私はみんなのことを認めていきたいし、私も認められたい。見た目で判断しないというか、その人のいろんなことを知つたら、自分にもプラスで楽しいと思う。だからたくさんの人と関わっていきたいと思^う。

高橋(男)僕はハンセン病のことについて聞いたのは初めてで、資料を読んだら外見が変わるとか書いてあつたし、金さんもハンセン病に感染したときは悲しく絶望したときがあったと思うけど、昨日の講演会で話を聞いたら、そんなことを感じさせないで、生き生きと話してくれて、希望を持って生きている人なんだという印象を受けました。講演の後でした僕の質問に対しても、ていねいに応えてくれてうれしかったし、金さんが持っている長島愛生園に対する思いがよくわかったし、金さんはすばらしい人で尊敬する人だと思^うました。

T10：質問したみんなのまなざし、そのみんなのまなざしに返してくれる金さんの一生懸命の語り、そのみんなの目に語りかけてくれる金さんのまなざしが、金さん的心だと思う。金さんの目、目を少し悪くされて、分厚い眼鏡をかけておいでるけど、一生懸命みんなの方を向いて、決して中途半端に応えない。みんなの質問の中身がわかるまで一生懸命確認されて、精一杯の言葉で語ってくれる。その姿が金さんの優しさであり、金さんの強さだと思う。そして、そんな優しさや強さに気づき、その優しさや強さを学び合うのが人間として生きることだと思う。

8 自分との違いを認め合っていけるような人間になりたい

高橋(女)私はハンセン病の人とかを見て、恐いとか思つたらあかんと自分に言い聞かせた時があつて、それってやっぱり間違っているなって思うんやけど、昨日金さんの話を聞いて、恐いと思ったらあかんと思うんじやなくて、その人をそのまま認めていっただいいんだということがわかりました。私は学校生活の中でいろんな子が、自分と違つたりすると悪口を言つてしまつたりするときがあります。でも、それは自分にとっていいことではないし、だれも幸せにならないと思うから、自分との違いを認め合っていけるような人間になりたいです。

田中(男)自分は最初金さんはどんな人だろうと思ったけど、人間としてとても優しい人だと思いました。

富長(女)私は金さんに会う前は暗い人かなあって思つていたけど、実際に金さんにあつたら、すごく明るくて、差別をなくしていこうとしている人は本当に輝いているなあと思いました。

田村(男)僕はハンセン病がどんな病気なのかを知つたときは恐かったです。でも実際はそうではありませんでした。ハンセン病で差別を受けた上に、民族差別を受けてきた金さんなのに、そんなものをもろともせずにはねかえしているように、穏やかにていねいに差別をなくしていくことのすばらしさについて話をしてくれた金さんに、人間としての強さを実感しました。

T11：金さんの講演を聞いて自分なりにまとめてきた思いがあるだろう。その思いを自分自身への叫びとして堂々と語りつなげていこう。そんな仲間の発言からまた違つた自分に気づくことができる。それがこの学習の意味です。みんなの考え方や思いを堂々と胸を張つて、クラスの仲間に語つていこう。

9 違いを違いとして認めることのできる人間になりたい

中川(女)板野中学校に金さんが来てくれるということで、金さんについてやハンセン病について勉強してきて、金さんがハンセン病にかかっていることは知つていたので、はっきり言って、私はどんな目で金さんを見つめようのだろうと考えてしまつっていました。私にはやっぱり差別意識があつて、そんな差別意識を持つてゐる自分が嫌だし、恐いとも思います。でも実際、金さんが体育館の中に入つてきて、みんなで拍手で迎えたとき、私はどうしてあんな思いになつてゐたんだろうと思いました。全然私と変わらないと思うし、少し病

気になっただけだと思います。そして、私なんかと比べものにならないくらいすてきな人でした。それならもっとハンセン病のことについて、他の人にもわかってもらいたいと思ったけど、自分もまだわかっていないところがいっぱいあるのだから、自分の中にある差別意識を消すためにも、もっといろんなことを知って、違いを違いとして認めるこことできる人間になりたいと思いました。

中川(男)最初、僕はハンセン病とはどんな病気かと思いました。でも金さんからハンセン病について教えてもらって少しずつわかつてきました。僕は一生懸命自分のことを通して、ハンセン病のことを教えてくれた金さんはすごい人だと思いました。

濱 (女)私が映画とかで見たハンセン病はすごい病気でした。私はハンセン病という言葉は知っていたけど、その本質について全然知らなかつたことに気づくことができました。本当のことを知ることは、人間として生きる上でとても大切なことだと思います。

中村(男)僕は金さんが来る前は、病気がうつらないかなって思っていたけど、金さんが来て堂々と話をしてくれて、金さんはすごいと思いました。

林 (女)私はハンセン病のことはあまりわからなかつたんだけど、金さんの話を聞いてよくわかったような気がします。金さんは私の想像していた人とは全然違う明るくてすごい人だと思います。

平野(男)僕が金さんの話を聞いて思ったことは、昔の差別はすごかつたということです。金さんは長島愛生園に隔離されていたけど、ハンセン病がなかなか感染しない病気であることがわかつたし、初めて金さんに会うことで感染しないかと心配していた僕も差別していたと思う。だから人を外見で判断してはいけないと思いました。

福井(女)私は最初ハンセン病とはとても恐い病気だと思っていたけど、先生と金さんの話を聞いてなかなかうつらないということを知った。無知が差別を生むということはこういうことかなと思った。だから、これからはこういうことで差別を絶対しないようにしたいと思う。

10 無知から起る愚かな差別が今も生き続けている現実がある

T12：いろんなことを知るということは、みんな自身の生き方を確かにしていく、その人生を豊かにしていく。それに対して知らないということは本当に恐いことなんです。ハンセン病のことは長い長い間、ライ、もしくは、ライ病って言われ、長い間治らない病気といわれた時代があった。でも、金さんの話の中にあったようにハンセンという人が、この原因を突き止め、特效薬ができて簡単に治る病気になった。その中で治らないというイメージの中で使われてきたライ病という言い方は今はされずに、ハンセン病といわれるようになった。でも病気になったときに末梢神経が冒されたことによって、かつて起こった鼻や耳たぶ、指などに起こった症状から未だに強烈な差別を残しているんです。みんなが結婚するときに、みんなの身内が結婚するときに、その結婚相手の身内や親戚にライ病の人がいなかったかということを聞き合わせて、そういう人がいたら結婚に猛烈な反対が起こる。そんな全くの無知から起る愚かな差別が今も生き続けている現実があります。みんなでハンセン病に対する真実をしっかりと自覚しながら、そんな愚かな差別をなくしていく生き方をみんなで築きあげていきたいと思う。それが金さんの講演を聞いた私たちの使命であると考えます。みんな自分が金さんの話からつかみ取ったものを語り合って、金さんの訴えや思いについてみんなで深めていきたいと思います。

福原(男)僕は金さんのニコニコした表情に人間としての強さや優しさを感じました。

藤井(女)私は金さんを初めて見たときは、全然恐くなくて、親切で優しそうで人の心をだれよりもわかつてくれる人だなあと思いました。日本の方じゃないけど、日本人より日本人らしいし、ハンセン病にかかっても前向きに生きている自分に誇りを持っているからすごいと思いました。私もハンセン病のことをもっとしっ

かりと理解して、これから前向きに生きたいと思います。

美馬(男)ハンセン病は骨髄炎などにより手足の指が短くなったり、鼻の変形などが起こって、昔は指が腐るとか言われて嫌われていたけど、これは神経障害の後遺症で病気のメカニズムのわからなかった時代、治療法のなかつた時代、この病気は誤解と偏見のために嫌われてきた。僕は韓国・朝鮮の人に対する差別やハンセン病患者に対する差別や偏見をなくすために、多くの人との交流を深めていきたい。

T13：いろんなことを知るということは、いろんな人と出会うということ、実際に金さんと会って初めてわかったことがある。初めてこんな気持ちになったという人もいるだろう。今度みんなが直接長島愛生園に行き、金さんの生活の舞台を見たとき、また違うものが見えてくるだろう。人と会うこと、様々な場面に立つことが、みんなの可能性を広げ、みんな自身を豊かにしていくことにつながっていくと思う。みんなの感動をつなげていこう。

藤田(女)私は金さんの話を聞いて、うつりにくい病気であるのに、いろんな偏見があることがわかったし、いろんなことを勉強して正しい知識をつけたいと思いました。

米多(男)僕はハンセン病について恐いという思いはあったけど、実際に見て普通の人とほとんど変わらないと思いました。ハンセン病になったからと言って差別をするのではなくて、お互いに交流を深め、ハンセン病の人もいっしょに暮らせるようになってほしいです。

湯村(女)ハンセン病のことを必死に語ってくれた金さんことを忘れないようにしたいです。

和田(男)金さんの話を聞くようになり、最初はあまり良いイメージを持っていなかったけど、金さんの顔を見ると、金さんは微笑んでくれて、すごくさわやかな感じがした。そんな金さんに民族差別をしたり、ハンセン病差別をしてきた人たちは、ハンセン病の本当のことを知らなかつたために、人間としてすごく愚かな存在だったと思った。僕は差別をすることを許せないという生き方をしていきたいと思う。

吉川(女)私は金さんやハンセン病のことを十分に知らないのにうつらないかなと考えていました。金さんの話の中でうつる確率は少ないって言ってくれたときに「よかったです」という差別意識みたいなものが出てきたように思いました。もしうつる確率が高いって言ったら正直言って偏見の目で見てしまうと思いました。けど、金さんの話を聞いて、やっぱり偏見の目で見られる人の気持ちを考えて、違いを違いとしてしっかりと認め合わなければと思いました。

11 人と関わっていくと、差別意識は自然となくなっていくと思う

新名(女)ハンセン病の人々の資料を読んだり、先生の話を聞いたときに、頭の中では差別はあかんと思った。それはうわべだけの自分が、善人になりたいっていう気持ちだったと思う。実際に人と関わっていくと、差別意識は自然となくなっていくと思う。関わっていくうちに自分にとって大切な人とわかる。その意味において、私は昨日金さんと会ってとてもよかったです。いろんな人と関わっていって、その人と自分との関係をつなげていったら、絶対にわかりあえると思うから、いろんな人と関わりたいと思う。そんな気持ちになれたことが第一歩としてよかったです。

赤澤(女)私はハンセン病のことについてまだちょっとわからないことがあって、金さんはまだ治っているから、普通の人と思えるけど、かかったばかりの人とかを見たら、末梢神経とかを冒されている人もいるだろうし、鼻や指とかが変形したところがあるだろうから、そういうイメージがまだわからないから、どんな人かがまだちょっとわかりません。だからそういう人たちにあってみたら、やっぱりなんか幅広くハンセン病の人たちも含めて、いろんな人間がいるんだなあって思って、それでわかるというか、知っているということで、いろんな違いを認め合えるような気持ちになってくるんじゃないかなと思いました。

T14：金さんは鼻や耳に対する変形は全くなかった。金さんにはやっぱり早期の治療がなされたんだと思う。

今はすぐに治療したら、そういう後遺症が残ることも全くない。でも、40年、50年前、今、70歳や80歳の人たちの中にはかなり重症になって治療が始まって、そのことによって鼻や耳、手の指に見た目でわかる変形するという後遺症が残っている患者さんもおいでる。そういう人たちと出会ったとき、やっぱり差別意識が出てしまう現実がある。藤田先生がハンセン病の患者さんが行きだしたヘルスセンターがつぶれてしまったという話や、ハンセン病の患者さんが行くようになったうどん屋さんに来るお客様の数が極端に減ってしまったという話をしてくれたけど、現実にそんな差別がまだまだゴロゴロしている。そんな差別の現実を解決していくために、今まさに人間の違いを違いとして認め合っていく社会をみんなで築きあげていくことが求められていると思う。そんな文化を築きあげていくために、みんなで様々な学習を積み上げているし、そこに学校の存在意義があるように思う。みんなの思い、みんなの考えを語り合いながら、違いを違いとして認め合っていく文化について考えていく。

佐野(男)僕はやっぱりそういう点だったら、差別意識とか知らんけん出てくると思うし、実際に金さんみたいに話してみたらわかつてくるケースが多いので、やっぱりもっと世界を広げていったら、やっぱり差別はまだまだあると思います。

12 学校から帰っているとき、自分たちとちょっと違う人を笑ったりすることがある

日下(男)僕も友だちとかと、学校から帰っているとき、自分たちとちょっと違う人を笑ったりすることがあるけど、そういうことをしないようにしたいと思う。

T15：みんなにとって大切なことは、このクラスの中での生活だと思う。家庭での生活だと思う。板野町での生活だと思う。実際の生活を考えてみると、人権劇をすることも、歌を歌うことも、あついがどうだとか、あの子がどうだとか、ついついだれかをバカにしたり、さげすんだりしてしまうことがある。そんなさりげない生活の中で起こっていく嫌な意識を点検し、仲間を仲間として心の底から大切にできるつながりをつくっていくことが問われていくと思う。みんなの具体的な生活の場面を通して、今、人間として大切なものを考えていく。

木内(女)私は金さんが体育館に入ってきたときや、話が終わってニコニコして帰っていったとき、すごく広い心の持ち主だと思って、なんか見た目とか全然気にしなくて、すごく心が優しかったら、だれとでも仲良くなれると思いました。

高橋(男)違いを認め合うということは、どの国でも、どの人でもやっぱりすばらしいことがあるから、宗教とか自分の考えだけで、拒否してしまうのはどうかと思う。違いを認め合う大きい心を持たないと、自分自身も認められないと思いました。

13 違いを認め合うことで病気とかで苦しみ、追い込まれていく人は少なくなる

高橋(女)長島に橋ができたときに、対岸に住む人たちから反対が起こったということを聞いたけど、その反対した人たちの気持ちが自分の中にもあって、そういう気持ちが分かるような気がします。うつらないってわかっているからいいけど、もしその病気がうつるとしたら、みんな嫌がると思います。1年の時に「マイフレンド・フォーエバー」という映画で見たエイズのことについても、人間はひとりぼっちになつたらすごくさびしいけど、一人でも自分を認めてくれる人がいたら、生きる力は大きなものになっていくと思うし、私もやっぱり自分を支え、励ましてくれる人がいたらものすごく心強いと思う。だから、ハンセン病の人が今苦しんでいるのは、自分の病気よりも、周りの人の目であり、差別的な嫌な心だと思う。そういうように人間を追い込んでいく人間にはならないためにも、いっぱい勉強してそういう心をなくし、違いを認め合うことがみんなでできたら、病気とかで苦しみ、追い込まれていく人は少なくなると思う。

奥谷(女)私はどんな人が来るのか不安だったけど、一番最初に入ってきて、同じだなあって思ってすごく安心

したし、金さんの周りにたくさん的人がいるのを見て、金さんが人間として優しいから、みんなが金さんのことを支えていて、差別をなくしていく仲間がいっぱいいるんだと思いました。私もそんな仲間の一人になりたいと思いました。

中川(女)ハンセン病の人を見たら、まず第一印象でもし鼻が違っていたら鼻が違うっていうことで、その人のことを決めつけて、認める前に、その人のことを切っているから、認め合うことができないんだと私は思いました。だから、第一印象ではなくて、その人のことをわかった上で、認め合える関係をつくっていきたいと思います。

阿部(男)昨日の話も聞くことによっていろんなことがわかってきたし、いろんなことを知ることがすごく大切だと思います。

吉川(女)私は金さんが愛生園をすごく大切なところと思っているのが、私の思っていたことと反対でした。私は強制的に収容された長島愛生園を嫌っていると思っていたけど、金さんは愛生園を嫌うどころかすばらしいところと話してくれたのを聞いて、どうしてむりやりつれてこられたところを嫌っていないのかと思ったけど、毎日の生活の中で支え合って生活している仲間がいっぱいいるから、大切なところと思っているんだと思いました。

T16：金さんが高橋君の「金さんにとって長島愛生園はどういうところですか」という質問に答えて、自分が40数年暮らしてきた愛生園が好きであると答えてくれた。金さんが愛生園に愛着を持ち、愛生園を大切な場所と考えていることに、私は金さんの豊かさを感じたし、その言葉に感動さえ覚えた。みんなの感じた思いを聞かせてほしい。

高橋(男)ハンセン病の患者は、差別が強くて、ハンセン病に対する差別はハンセン病の患者にしかわからないと思う。だからやっぱりハンセン病の患者が今、安心できる場所は、長島愛生園という場所であり、長島愛生園という場所がハンセン病の患者にすごく大きくてうれしい場所になっているんだと思う。

T17：時間がきたけど、今日のみんなの発言を通してまとめてくれるか。

14 いろんな人と関わっていったら、絶対その人が好きになると思う

新名(女)私たちがこれから生きていく中で、いっぱいいろんな人と会うと思うし、その中で今学習していることはとても大きな支えになっていくと思う。実際違いというのは、相手を認めていかなかつたら、自分も認めてくれないと思うし、いろんな人と関わっていったら、絶対その人が好きになると思うから、いろんな人と会っていきたいと私は思いました。

T18：いろんな世界を知るということ、いろんな人と会うということ、いろんなことを学ぶということ、その中でやっぱり豊かなもの確かなものを本当につかんでいく。これからももっともっといろんな勉強をしていこう。今みんなで文化祭の時に「水平社バンザイ」という人権劇に取り組んでいるのも、まさしく違いを認め合える文化をつくるために、人間を人間としてまるごと尊敬できる社会をつくるための営みです。それは自分自身が人間として大切にされる社会をつくることにつながっていくんです。そして、そのことはみんなが、どんな状況に置かれても安心して生きられる社会をつくることにつながっていくんです。そのことを毎日の生活で確かめ合いながら、みんなが生き生きと輝く日常の生活をつくっていきましょう。